



と如き事なりしは其の序に於て既に述べ  
たる如く其の如くは其の如くは其の如く  
條々其の如くは其の如くは其の如く  
其の如くは其の如くは其の如くは其の如く  
其の如くは其の如くは其の如くは其の如く  
其の如くは其の如くは其の如くは其の如く  
其の如くは其の如くは其の如くは其の如く  
其の如くは其の如くは其の如くは其の如く

あはれに候へば

而後

あはれ

復乃日集おれはひもよむ及の終

而後

出し給ふは其の如くは其の如くは其の如く

子ほひまゝしき属の安も乃 乙也

親類乃相成に能れよるは其の如く 一也

あちこちさるる其の如くは其の如くは其の如く 后

其の如くは其の如くは其の如くは其の如く 也

故屋ふささうしてひやくとす 法

結ぬる魚の産物路ら——、  
けしあふら村と今と流りり  
ふ松乃松もちてあ松を——まき  
何ふ乃流も松るいあめ九  
迂活るる店新燈乃火いあさ及  
級づれつうひの歌れさり——  
産神のさ——ひて松ハ松あし  
あさ——貸屋並ふ川——  
也 后 信 也 后 信 也 后

後てい信松結子後の女むま  
ま——と——信も——あ——  
まの——ら月うま——と——信終り  
ま——と——い——ぬ松の并れ子  
あつるれ松ひ乃松結うらあ子  
代松離うまこれ子うあころふ  
葉酒——と——鳥ふま——と——つけこはれ  
繁らぬけまらあうま——  
也 信 后 也 信 也 后 信 也 后

賣らるるをせきまそといははや

塩の出すまて 鹽の位形を

つきあひをいれし後乃初時を

まきをまつ 穉のいすに止らぬ

言しつゝなる百足抑ふる人よむて

鉄屑くまふ 柳乃やきと坊

かいとをぬりしきここの月こも

初葉漬——急平乃葉

后

后

也

后

后

也

后

后

やとらしく 後にかこへるあま子

ひましくを 糸さふと紙に

何れも 懐てあましと 各坊

炭炭こりつく 炭斗の座

まゆめの志よふら 船はあ

まらあひのゆく 岩をれの標

也

后

后

也

后

后

よの流に乳物乾や喜まされ

てまりの花乃落ふおと

あつと田へ出る花の喜ま

蘭葉ハ尾みく用丸まる

月よりと巻く海口の風のみ

乙き海り朝はさひお

乙也

阿

也

阿

也

水地路の雨をさくあつをふく

もらひ鳥子とこぬ親と

泊瀬の鐘鳴るぬれ花をうけ

むしり曲五枚おるこんよやく

何よりむせおの喜う園りま

ころの節もつ免る菜菔

月りけそ枯ひよ歩り小きま

あきこする海と芝うう

阿

也

阿

也

阿

也

阿

也

杉葉法師店乃水戸も冬隣

也

牛も物を負た馬次

也

おれも老木の茶の味也

也

るうちいれとくも山焼

也

ゆふめしれあも日多れ小ひと付

也

た友よりは縁をいへる家

也

をまうう借して確乃明るあふ

也

ちいさいさるの伝承とすむ

也

烏帽子まてやと隠る祢宮の福

也

徳利ちううて磁をのまれを

也

六月乃てうを待てる西尻畑

也

秘女をたふ家督の足若し

也

生れつゝ涙もらいつゝ痛ひもて

也

ちみうもつれとけつひきあく

也

押乞乃てうらん抱るまれ月

也

つゝとち橋のぬれる雪のま

也

家くゝ踏うけたまついで細  
 草の赤い日よりよらこぬ  
 としきり曆のそりれ前仕つけ  
 花くらしきくうらるひとき  
 其風に屋根乃梯の反りり  
 いそひ日こころりつふ石と若  
 也 也 也 也 也

心遊

何とやううもや初秋の日影身  
 砂乃ちめまきまきほほほ  
 空海雲に招くまらぬ招を焼て  
 花りきこひり月をまつこ  
 ふことねらあとの遠く者 若  
 あつたあつたの女あつたあつた  
 也 也 也 也 也



冥相へ送つて米乃うりきし

湖

女あふれを燈もつけくきぬ

也

毛坊之に乳のゆるきぬ言信

湖

山のくつぎりあまる色こち

也

おつふふは走の海と月研て

湖

くしちえりけし鐘うりえぬ

也

おれいもきくは喋れ小ひと時

湖

ささい及るるぬハつとつと

也

是月と田糸くもくろりし

湖

通ううりたにこき葉すは

也

あつとをぬかりきとまん日れきさ

湖

あつさふさをあくる毛祓

也

はね乃給る方奇特もつとく

湖

いそりの隅り爛れしある

湖

あつとをぬかりきとまん日れきさ

也

むきめまうり親の字こ入

湖

あしきなり葉もやの字ふりむき

也

顔一とくさる 桐葉の水

也

あつたふく日くれさうひれ月うそり

也

鴛ふされを 鷹野さひーふ

也

銀さうくまそに 管こむ 葉さふ

也

うさのふこに けける けのやま

也

皆ぬまの 舟一 塩梅を 出さきさうく

也

酒や丸うまを ことこれあてこころ

也

よーか出て 端こり ちかひも ちかひら

也

あやふの 泊る 傍ろきらつく

也

お海をぬるむ 流ふさう ちう 葉

也

うーおふ 風さう ちかひく 松苗

也

撥ひこむーら 木の 葉れ 葉

也

きつと おくさう ことん 帆 燭

也



としくに煙の下よも口きしき

也

いつまて園の船乃雜作

也

さくらもさくらこのしきしきこのまら

也

日乃歩ぬさふふ僅初すむ

也

うくむんそつれをほくのまらるる

也

阿らかた彫きし石の狛犬

也

降りあはれをえんけて垢離をかく

也

さくく成乃さふりりる

也

故極つく株乃ひききのそめあし

也

春日高むきあはさるるさゆく

也

まーおひのきつて腰あはぬるし

也

あーむきにぬく替挽の下結

也

あー地さ臭乃踏ももたやいとあ

也

小袖つられを靴はきかむ

也

まらみつくはより月の照つき

也

おくらと西家の穂をたてし

也

門前つらもこのまゝはみし梨  
 あんても耳てまゝは換換  
 まぎに板をさといく日とあて  
 山崎の所にもゆるり  
 笑くやうもの心をもして通し  
 八十八夜まのあしけり  
 也 水 也 也 也

葎の復之部

百八句

以松系籤列之

音のころ川まうんにきて河まは  
 田まやうけも、とあはつみ智  
 うれまをまゝ、茶まより雪乃相  
 修りうらまをかくてこは日やねあのみ  
 一ころあふ中りおれあ回う事  
 字邊をつゆの事として、京乃り  
 柳高 完位 喜相 梅通 葵山 二階

牛の子や嫁行くおふところより

芳字

己の牛や皮より己けりひと我ま

糸魚

旅人よまゝ行きて家へく河あまうね

旅心

こやこまをさくをさくしきまをさ

宗雪

板の裏ささやまをさるゝる行く明子なり

家三

川骨もまよふ板のほちみうふ

乙良

只ひとらとり残されしを袖うれ

此風

物くけにいふ九馬や麦乃秋

此風

明るまおや酒籠乃き

一

士前

まみま行やきの子つむ山鳥

岩生

あつらぬ夜も麦れ塔り

月持

風まゝしきぬ乃き

流 文 流

ふくねまや城屋まつきなり

長

おのろやるもみまのりつう

善

まららのやアキこりや枯枝さく

万像

うけお寝ぬわつてまのり

五休

くちりさくあつきさきとや 瓦

桂李

ゆきさらけに先たらまらるや 葉の風

茶乐

まゝまきにまゝくやわくしうり 足跡

大年

人あつてこゝろこひく 清き水の流

和雪

こゝろあつてあつて如命 田植をこ

泰山

まゝまきまゝまき 田つれあつてゆれ

李裳

まゝまきまゝまきまゝまき 田つれあつてゆれ

石山

皆田つれあつてあつてまゝまき 田つれあつてゆれ

九起

まの穂や風くむくむく 古埃り

半仙

おちりうちりうちりうちり 葉の花

山子

こゝろの根もまゝまきまゝまき 田つれあつてゆれ

松良

おちりうちりうちりうちり 葉の花

曾教

さくらたつたつたつたつた 葉の風

眉自

まゝまきまゝまきまゝまき 田つれあつてゆれ

西川

まゝまきまゝまきまゝまき 田つれあつてゆれ

敬雨

あつてあつてあつてあつて 田つれあつてゆれ

半宗

かきよのまゝて方高きくもとの星さう程  
西南

漱をこぼこさうのまゝや能くも及  
知母

碁うける様于より一差のまゝ  
樽水

ひらりまて甘味もさうあつるま  
三巖

りりねのまゝ先より凡のはね  
仙翁

あつた物をりしてくらくすもみ  
松隣

まゝもまゝのまゝ葉やさうり  
赤鹿

田はまゝや植つておるにまゝ  
星岬

ゆるゆるやまのまゝに相のまゝ  
菜山

あゝゝ乃あゝゝれはまゝもまゝ  
菊雄

ゆれあゝゝ大まゝゝまゝのまゝ  
住友

苔のまゝやゆるまゝもまゝ  
龍川

おきおゝ棟のまゝりや葉まゝのまゝ  
梅屋

はまゝゝはまゝゝありまゝ  
双鳥

まゝゝゝやりまゝたゝゝまゝ  
滝屋

はまゝゝやりまゝたゝゝまゝ  
逸閑



子規 里を鳴きまゝる 秋の郷

長芳

川よりや 舟のあはれ 舟を渡る

久三

南毛の 毛を 五月 毛の 毛の 毛

新水

おひく 舟の 舟の 舟の 舟の

雲史

持く 舟の 舟の 舟の 舟の

百翠

船 舟の 舟の 舟の 舟の

鳥若

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

拙島

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

杜詩

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

士精

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

涼吟

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

治風

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

石成

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

松露女

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

梅文

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

素坊

舟 舟の 舟の 舟の 舟の

石陵





てのくくゆわくまきし橋の縁

ま秋

杜鵑こころをさあしく西ひの

ぬら

灯ともをさしひの飛はぬ子さ

梅笛

笛鳴やこころをさし乃草の葉きりり

指石

鶺鴒あくやあさるれらのふき荒原

極堂

滝城乃かこ林をひくこや五里

子ありれらこ、河ぬ雑川

乙也

乙の日にあはれあつらん乃部

李曠

しら溪の波風やさしそれらこ

あふまつこころもきくぬ日さうり

乙也

わし何お救乃る戸をさうり明て

あそひお人のつくりもあは

噫

ふらふらと丸ころのまかま秋乃月

ゆらゆらとくに粟こころ入

也

つれづれにんくー塔燈乃まひあかり

暗

鈍ふところろくごさる 冥夜毒

也

おとしむきききぬ母にまねあて

暗

あゝかさの極ふ瘧ねさくね

也

店かりもまご落つうぬまき橋

暗

たゞうて冥うて分るもち末

也

牛の背を帯てまふとこれれ

暗

豆まのまゝにありる里坊

也

各汲にわると曳ぬあの子あり

暗

蝶のくまの抗をりうつ

也

まきけを月もある星あるうき

暗

あゝあゝにころふ帽壺

也

くまけふ樹の糸をうらねて

暗

市日くまあけけの家

暗

羅もめおれまあゝ秋葉傳

也

風うやまのこを佐屋ものれぬ

暗

石もこの竿に引も馬合相  
 也  
 女房乃智恵よまされて  
 也  
 来りてに七夕おと笑を結て  
 也  
 月細う九うつく相の糸  
 也  
 てりて去乃芭も種れまき  
 也  
 生餅乃香白細ふこむつう  
 也  
 映るよりふくぬあま十五ふ  
 也  
 粧をさきれ結つた  
 也

たあみの葉けきめうきうふて  
 也  
 冬中楳乃侍をはれまぬ  
 也  
 ひとやあり小石も踏く山の家礼  
 也  
 こんつ子難をまきうてゆく  
 也  
 半切このもて茶をうるさのうけ  
 也  
 まく先葉をくふ朝乃置柴  
 也

乙也

出たおりに僧を師と仰ぐ

むき少僧ありてつる昔の意 其意

下宿ハ穢乃留やそふりて 也

逗留中一とさけきくもむ 哉

日原ハ此板をさまん三日の月 也

法くく海りつとてふも 哉

洗ふら釘のまねき 右つ急 也

うき世画うふとよふも仇先く 哉

垣百んまきもあまのちとまき 也

去波うらおつと男みけり 哉

ころつてももつけ流れ乃とりの布 也

坊にあらまてふとあつと布 哉

日よりももこひれまに足詰りけ 也

提の舟を舟のてららん 哉

ひさしとあゆみ丁のあつく井と  
まこり此屋燈ハ分れ所  
もつ老とひさしとまこり  
あめすれりあして治るこつら  
彼ん証と氣とあつるひさし  
田舎とこり此人形仕あつる  
五六自掃してあれとまこりの  
雀乃餌あともらふまこり

也  
也  
也  
也  
也  
也  
也  
也

酒あもさうれきんをあれ  
さうこのあつるをてんね  
祐宮とまこりあつる  
桐よりとまこりあつる  
あつるまこりあつる  
祐宮乃まこりあつる  
あつるまこりあつる  
あつるまこりあつる

也  
也  
也  
也  
也  
也  
也  
也



産神の神跡もあまの秋仕舞  
 支配かそりく村をえと家  
 三弦乃勢古やまめらふさひ九  
 ふ影の操れとれもあそめ  
 花のうらたそりくまて果すふ  
 さくらもりこものある川  
 也 弟 也 也 也

乙也

これあまの清水の湯乃根さう  
 木しちりぬるまにたれけりけ  
 まつりりとおなるのすまきあられて  
 蓮ひらくきれとれるし  
 瀧溜乃消きく月のまきたみ  
 小きれあまをまめ九とけり  
 也 也 也 也 也 也

くまら編におくぬ西来乃出朱

のちりおしきし帰きと一り

豆やはこ拵女交りくほくえあひ

くけれふこくわ河を家くくまひ

美の花秋れ子すて咲くり

こきあて月もあむ十月

智古葉のちりさいく雇われて

眼のひきをえんて既痛抑く乱

也

然

也

然

也

然

也

然

玉川をゆき又よなてもあむし

堀とて音法軽いつらまふ

さら櫛乃漆の白ひうくうり

のけ絵れ雛乃風こころきる

いこくも巻とこわれ忌まらひ

ひと憶もくのあまき船中

歩もろれ乳母れ悟るのほけの給

あそこく巻れまて廿新乃大く屋

也

然

也

然

也

然

也

也

水乃砂ふをけの亭あり

終

鳥も瘦る梅もをまらるる

也

雪のちまはりの白鳥ふけ

終

柳をこころつく猶乃引出

也

かゝるに役所乃流もよをつらね

終

月を夜明けの六八日

也

息枯れゆくあゝるれハ船戸をさき

終

菰とねもつぬ伊勢乃宅宿

也

還候きこももめの名を呼れ

終

船てこころりと死をめでさき

也

高風吹く帆をまなく船をこころり

終

あらふ候鳥の戸一やのれし

也

ひらりと下枝のまきまきのゆね

終

そまも一乃ふれ地をすつて飛

也

乙也

神録乃光る本の可や其のふね

穂もあさしねる喜舟の船

李裳

賞さす新とまふ国丸好

也

うつけ好まの不りせしゆる

也

外結に會う樞ねしおま

也

神帳のやれにけれまふく

也

在ふてを城にとよと海、角城取

也

京道りや免を告このき僧

也

くくの急さくぬの世の中に

也

さのころ備んと昔李又来る

也

朝やうて石も四するるしつ

也

社のとやうしつらるおし

也

歩とあり葉木おぬはるのうけ

也

味やするおしよまらるし

也

降了丁言( ) 燈付の吐くこと

子種まけくくお持

新蕎麦の音板斗あか

嵐い〜はふ月のそりこむ

出代や始お年こまこと

辻占せり〜五ふ丁ゆく

袴桶をほけるはるのひきつふ

他國乃山のさふ川上

也

也

也

也

、

也

也

也

赤くと日のさ〜のほるさの入

精進おちに鴨乃鞋炊

雲抜屋の年ハ常任ありもらい

瓦あり〜け旅うの名をか

ひつ〜と美朱をかむ子のき力

儀さみ出は器池の槽

月の夕舟を大うこ浮るるり

雲が〜めりふ庭も〜く

也

也

也

也

也

也

也

也

八朝と昂白粉うろも子糖して 崇  
 せんここの坊に糖下乳下糖 也  
 活て花やうになりてとるなり 崇  
 きらうりたの、こふき 也  
 若深くまの糖意水にあり 崇  
 糖糖の糖をいりまもやう 也

豊向秋之部

七十二句 位置如先條

ひらりとふくねぬるりぬらふの糖 蒼岬  
 秋風や干潟へのは夕の泡 詩糖  
 古少ぬのひまらなるとある菊田赤 唇秋  
 糖乃うよふこもあつらう女良を 苜郎  
 ちちちちちちちちちちちちちち 祖心  
 ちちちちちちちちちちちちちち 豊池

三日月やまふふしの角めさる  
 とらりねまねぬ乃曾あやきうくは  
 飛く出るもこころあそびしきみの  
 田の風乃らそあそびあそぶるうは  
 ひらうさくに習さうらうらなほむ  
 さらくもあそびしきくは  
 穂すまきや川うらなうらなうらな  
 松風のさらくも星のあそびかれ

大栗  
 悠平  
 峯水  
 左印  
 西三  
 五藤  
 指朴  
 采女

船うほやうらなうらなうらな  
 情けやけうけの糸もくは  
 とらあふやまねあに何しらの  
 まあらり中うらあそびうらな  
 いれつ戸のひうらうらな  
 けうもあもくはうらうらな

法衣  
 烏月  
 清高  
 采女  
 布衣  
 采女

采女

秋うらやま乃香のうらな  
 一橋

船ゆふれりありあやうく木槿垣  
 庭知  
 ありきこみれりもすみてこの川  
 田端  
 ありあふ川のあうそらるの海  
 巴水  
 日さすくくそりすく影や村もこら  
 醒色  
 字一ろほくくるまをふや柳み葉  
 岸一  
 若くけあまけりも来り月乃る  
 三根  
 夜はあふやまをさくわけは月の空  
 空水  
 街乃るるありく影み暑き  
 梅裡

ちやまよりぬるまをゆり貸小社  
 多妻  
 戸あふれをまをゆるそらるの柳  
 符全  
 雑あふららのまをゆるらきめくれ  
 山士  
 秋すーら後のあみ美ーま  
 尼外  
 葉や稚きいら乃花はの里  
 魯心  
 うらかれや隣へりも風あかり  
 杜月  
 暗ありにちあてすー筆のおと  
 童子  
 折々れをまありたきさよらの柳  
 赤糸



露能下結く研うらあけては好もむ

左江

乳さむうらや木乃るの里のり

運穂

楫あけて楢さ川や秋乃風

不退

つのおう蒼乃むれて秋々れゆ

静正

残るく好もこころもあや雲むし

露牛

葉ふまてふりりとあや蒼うね

石舟

あうゆのやりの音名や鳴うつし

聖務

葉の音はむとをおりし海はり

景佳

穂芒や尔波よまの海うらひさき礼

侯弟

ひやくとあもりまふまの山家うれ

尤峰

さきぬし始終もねくて日々をぬ

完臨

吃り

いさよひ乃氣のけしんや池のを

李曠

乃軽うやうけけゆくや藤袴

蓬森

あふのせのうふうめうまのや

蕙逸

くらねや木乃るにゆるさむ根

不角

禁下うゝ葉のうほひやせうろ細

通六

けこ細や黄つらにおるる影影を

赤甫

うろ月おく皆のりちとれはら

泊菫

帽つちやみよれ柿一菊のまを

神也

まおろし舞にちや午のま

蓬宇

いらねやこらねあまのひとま

仙曼

世業やぬくまをいらぬみり

永月

管まをい 俵のうらや相一葉

昔唐

こち社そのま後や岩根をひとま

丹嶺

いれつちやまをい 列一目のまを

金月

人まをいばれをい 松のまをい

大菱

名月や 藤をいよこまをい

巳足

おそまをいちもかたおまをい

大竹

ちよらちりとまをい

高舟

夕やうたをい

杜堂

あつちまをい

冥市

人よりよき後金さうや星の雪 一書  
吹あけられればやああり 可耕

極活

積もるもやあそまの眼さうふ 而后

菘懐

秋とこにゆのこ洗ひぬまこひ 乙也

夏れり菓子細影の部

傾尚

ひとりあて何もおもぬきまの事

我うぬうちもかきる麻 物 乙也

惜しむにゆるきをやうに滑やん

燈つぬ火をよあそりこふく 尚

雪山より月の澄きる 藤原ま

節々る板さきく 雪子こ 也

らんちりと響かせきゝる息くを九

当

味了むき免乃便変うら出る

也

顔見せくのぬきれうらひさう隊

当

水掬る多をまにて者され

也

まゝ起の腺多めしゝま引しと

当

まゝすの葉お襟をささる

也

埃取も拭いたるる妙人者

当

火のるま火入配るこゝろけ

也

足袋ぬごたふをさるぬ襦月

当

さゝり捲るる花のゆさく

也

ぬゑむやうふつりくと泡乃うく

当

はい鏡あけこ世れ物日

也

唇人の唇ふ大きれ丸さうめ

当

ひとく懐のりゝ実こ保る

当

橋詰を何と乃候りも弁理よき

也

管さうらんで送るまぬく

当

あしはまをさすまのなまむつりき  
あまの海へつるつる  
祭礼をさして新く枝をさす  
係りやうのさくはさる  
十月乃おをさす一月のさる  
袴をさすにともな名代  
さうはさくさるにさすさる  
くさくさるさるのさるさるさる  
あ や 当 や 当 や 当 や 当 也

常はさるさるさるさるさる  
居さる男乃さるさるさる  
門をさるおけをさるさるさる  
種くさるにさるさる物さるさる  
年おさるさるのさるさるさる  
さるさるさるさるさるさる  
あ 也 当 当 也 当 也

乙也

村中乃一軒店也

麦のちりふりふ日表

士莠

他猪入物ら九あつて

也

吹くらんれを唾を吐く

莠

名月小雲流りきる

也

此のころりの風いひや

莠

うら枯く藪子ちり

也

移るのつあに

莠

常くさふん

也

廊下をうら

莠

三方にのそ

也

船のり

莠

平屋

也

菰々

莠



このあつりそ 根さしハ 乃ぬし 芳  
 平地うらうら 湯ぬれぬらひ 也  
 手もつけ 根を 委れぬ物 芳  
 さつと 押出す方 委ぬるも 也  
 夕景より 生るもの ぶうなり 芳  
 事う 受けとぬむ 内海 也

乙也

新也 根さし 乃ば 乃や 乃ぬの 乙  
 ひるさうり 乃し 委ぬる 乃月 三 根  
 欄 乃ら 委ぬる 乃 委ぬる 乃 也  
 焼と 小 乃を 乃も 乃ぬる 乃 根  
 乃ら 乃ら 乃の 乃より 乃ぬる 乃 也  
 乃宗 乃 乃ぬる 乃ら 乃 根



方丈の襟や紐をとりはくらし能  
 るやとありしと出ぬる仲石屋  
 度あるべし古き物をもて  
 ナカシキナカシキ物  
 二階までく物にひかりは美し  
 あり乃槐を秋もつらつ九  
 よき何れある日志をきく月の内  
 物鮮し乃ありきと出ぬ  
 楓也 楓也 楓也 楓也 楓也

料理もきあはれとすうせの生身  
 ありて火入り指もけりきぬ  
 ありて七きりやある意のせと  
 東風にひありけは海に揚浪  
 文をく水瓶つくるよりそりひ  
 一とありきより高に合筆  
 長生乃一たきく酒をのそおちえ  
 男をとりけ孫乃き味とまき  
 楓也 楓也 楓也 楓也 楓也

河もたふらうと板戸の行はまき

楓

おのひもつりあうみけり

也

まよむくの葉をそらりとおろせて

楓

赤く咲てもうおほりま

也

河に波も勢乃多九月夜さし

楓

阿くゆ子にのぬ舟寄

也

寂上うも人をたのし九

楓

戸柳飛花をまきる新巻

也

六

さつものむのふえたるあつ四

楓

美やまらうのて白ふ落れ芽

也

松をまきおけをとのあもまにふる

楓

ふちつらまき正月乃餅

也

のあり葉えらうそみてもま外て

楓

つまんと燦乃落りひつく

也

酒樽にゆめ日しそやいねのま

沙魚はる竿の舟ふ川端

まらりと袖しと波ふ秋くねさ

ちのちよまに菘月さする

あゝいそやー炭塹と穴はり

清と巻火乃風りほりつく

乙也

梅裡

法

也

裡

今の代のうらさきしきとと

并ぬいと巻乃くつね

かーと巻ぬのむらゑ急うせて

十枚の経り袖等のお伴

たらしと府中の中け成り生

おろろりおれり乃ま籠さ

畧り経らねむきとゆる月乃露

あそふとつと和島碁り

法

也

裡

法

也

裡

法

也

はあさり 狸もなれやうね七の  
障さくあきち垣のそきま  
桂満乃花は日ごとくにぬてゆく  
あまひあつもうけらあめさ  
出代りてまことしき業にまらり  
かろ習性つてふ板の間  
さるの鞠乃れらあまし  
嫁あつとらほつとあま

法 也 一 裡 也 法 也 法 也 法 也

蟹くさ売えとれもぬうま  
いつたうさきて雲のあまさ  
拙さくそ書のはつ九丸  
茶め五ふくまつうまに  
あつりきふ輪のねくま  
障り高きさりの看  
月の垣のふく雲れ種  
あつりやうに飛ちふむ

法 也 裡 也 法 也 法 也 法 也 法 也

橋をたゞすの意なりと志つてを

居りまゝひ乃独せり一葉

即ち乃をぬあひを眼を解り

門を志んぬと心家申

来とまにけも意うぬり乃水さ

来のす来うう釣以風終

禮

也

禮

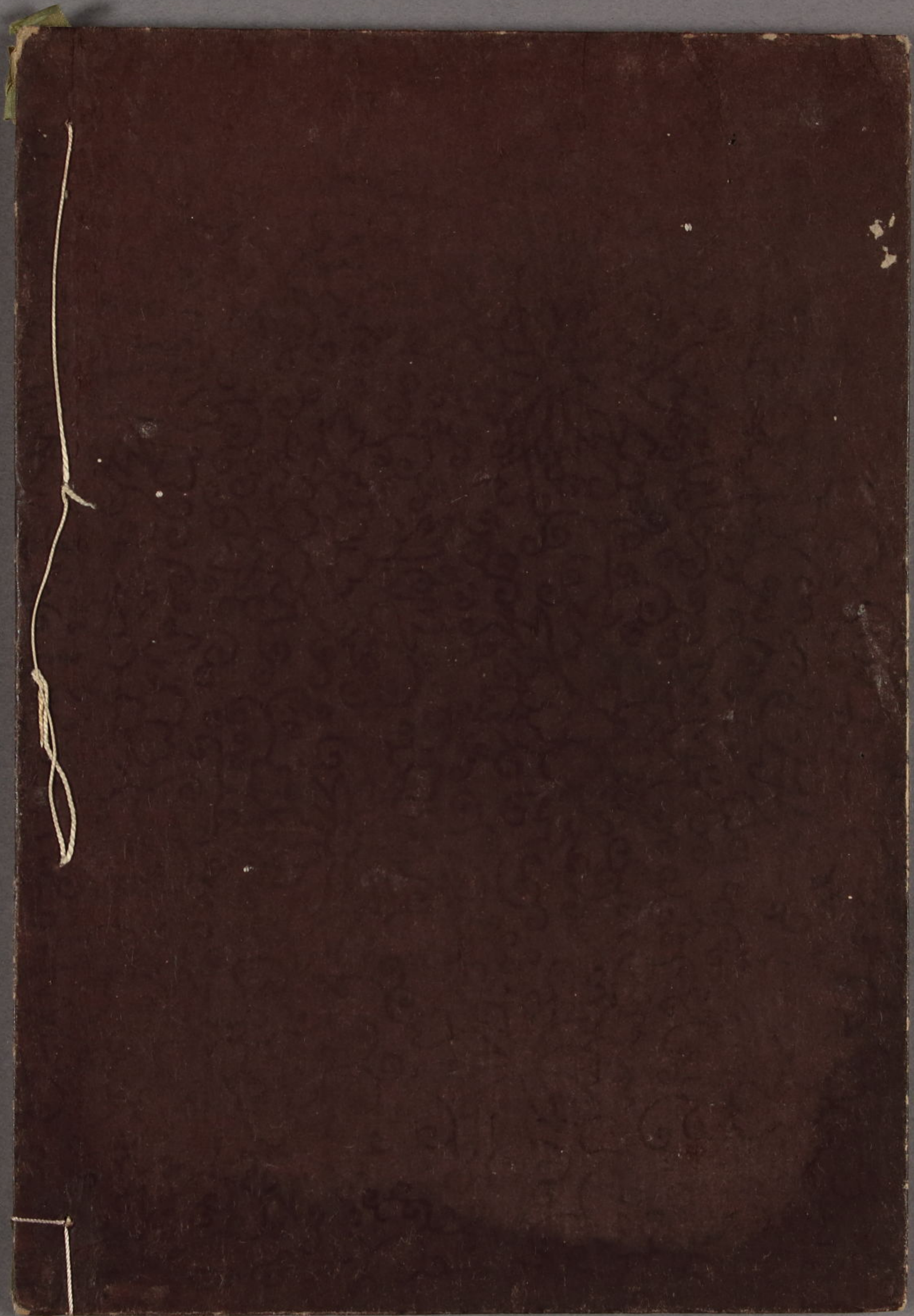
也

禮

也

尾陽經師勘助仕立

尾陽經師勘助仕立



辰井乃らその控中物して  
あきるまをこまに控へて  
まの生るけい先御紙の  
切まゝにすまのハ

少三程まへに  
清海と也

京東洞院四糸下  
 同泉之柳之舍西入  
 大坂心之柳後町北入  
 名古屋京西通蓋下  
 同中下標登所  
 大海上京所  
 右之処の多言なり

相庭新淡節  
 小母や孫今  
 佇後一清  
 大橋梅裡  
 十一屋安之清  
 進藤乙也白